

オプション教材グミ 暗唱長文集



●暗唱の手順 1 日分

・ 1 日目は、まず、**1**の文章を30回音読します。最初の数回はゆっくり正確に「てにをは」などを間違えないように読みます。

正確に読めるようになったら、ある程度早口で棒読みで、句読点などであまり息継ぎをせずに読んでいきます。

イスにきちんと座って読むと読みにくい場合は、歩き回りながら読んでもかまいません。

お母さんやお父さんは、読み方の注意などは一切せずにただ優しく褒めるだけにしてください。

15回ぐらいでもう空で言えるようになることが多いと思いますが、できるだけ30回続けて読んでください。

なぜ回数を決めて繰り返すかという、と、「覚えられたらよい」という目標でやっていると、暗唱の教材が難しくなったときに、「難しいからできなくなった」ということになりがちだからです。「決まった回数を繰り返す」という目標でやっていると、難しい教材になっても同じように暗唱ができます。

30回音読しても暗唱できない場合は、もう10回音読してください。

これでその**1**の文章が暗唱できるようになります。

それでもできない場合は、暗唱の自習はいったん終了してかまいません。また機会を見てやっていきましょう。

●暗唱が難しいときは

暗唱のような短い時間の学習は、夕方にやろうとすると忘れてしまうことがあります。また、毎日同じようにやらないとできるようになりません。できるだけ、朝ご飯の前などに、家族のいる中でやるようにしましょう。

そして、暗唱を毎日やるのが難しい場合は、暗唱の自習はせずに、読書の方に力を入れていってください。

●暗唱の手順 1 週間分

- ・ 1 日目に、**1**の文章を暗唱できるようにします。
- ・ 2 日目は、**2**の文章だけを同じように30回音読し、暗唱できるようにしておきます。
- ・ 3 日目は、**3**の文章だけを同じように30回音読し、暗唱できるようにしておきます。
- ・ 4 日めは、**1**、**2**、**3**の全部通して、10回音読します。すぐに暗唱できなくてもかまいません。
- ・ 5 日めも同じように、**1**、**2**、**3**の全部通して、10回音読します。
- ・ 6 日めも同じように、**1**、**2**、**3**の全部通して、10回音読します。
- ・ 7 日めも同じように、**1**、**2**、**3**の全部通して、10回音読します。すると、**1**から**3**の全部の文章が暗唱できるようになります。

●暗唱の手順 1 か月分

- ・ 1 週目に、**1**から**3**の文章を暗唱できるようにします。
- ・ 2 週目は、もう**1**から**3**はやらずに、今度は**4**から**6**の文章を暗唱します。
- ・ 3 週目は、同じように、**7**から**9**の文章を暗唱します。
- ・ 4 週目は、**1**から**9**の文章を全部通して、毎日4回ずつ音読します。
- ・ すると、1 か月で**1**から**9**の文章が暗唱できるようになります。

●暗唱の活用

・ 暗唱のコツをつかむと、自分の好きな本の1部を暗唱したり、英語の教科書を暗唱したりできるようになります。また、覚えるつもりがなくても、物事が頭に入りやすくなります。

●より詳しい説明は

より詳しい暗唱の仕方は、「暗唱の手引」(<http://www.mori7.net/mori/mori/annsvou.html>)をごらんください。

1 幸福という言葉で私たちが思い浮かべるほとんどは、得る幸福である。しかし、その幸福は一瞬にして過ぎ去る。得る幸福を手に入れたあと、間もなく人はまた次の新しい幸福を考え、その新しい幸福を目指すようになる。

2 これは、一見、向上心の現れのように見えるが、そこにあるのは向上よりもむしろ焦りであろう。競い合い、奪い合つて幸福の幻想を手に入れようとする。手に入れてもそこに永続する幸福感はなく、再び、得る幸福を目指す。**3** 幸福を感じるのは、得る途中の過程であつて、得ることそのものではない。

得る幸福と対比されるのは、在る幸福だ。それは、状況の如何にかかわらず自分が幸福であるという形での幸福である。

そのような幸福は、比喩的に言えば子犬の幸福と言つてもよい。**4** それは、求めているときも、手に入れたときも、また次に求めるときも、同じような幸福感の中にあるものだ。

つまり、食べ物を手に入れたときの幸福、それを食べて満腹になつたときの幸福と同じように、飢えて食べ物を探しているときも幸福でなければならぬ。

5 幸福とは、自分を離れて外にある何かではなく、自分というもののありようなのだ。

中村天風が、カリアツパ師のもとで修行を始めるようになったとき、天風は既に何年間も奔馬性結核という不治の病に冒されており、余命はいくばくもないと言つていいほどだった。**6** その天風に向かつて、カリアツパ師は言つた。

「お前は、今、自分が調子が悪いと思つてゐる。その病がなくなつたら初めて自分がよくなると思つてゐる。そうではないのだ」

7 そう言つて、天風の腕をナイフで傷つけ、傍らにいた子犬の前足も同じように傷つけた。驚く天風に、カリアツパ師は言つた。

「どつちが先に治るか競争してみろ」。

日がたつにつれ子犬の傷はどんどんよくなつたが、天風の傷はなかなか治らなかつた。**8** 子犬は、傷をそのまま受け入れ、毎日を淡々と生きていたのに対し、天風は傷つく前の自分と傷ついている今とを比較し、その今を前提として傷が治る未来を考えて生きていたのである。

9 傷が不幸になるのは、傷がない状態と比較して傷にとらわれるからだ。そうであれば、不幸とは自分自身の気持ち作り出しているものであり、同様に、幸福もまた状況の幸不幸に関わらず、自分の意識が作り出しているものである。**0**

(言葉の森長文作成委員会 M)

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

1勉強が、何かを為すための知的な準備であるのに対して、学問は、そこから何かを創造する、人間が独自に生み出す知的な価値だ。

言い方を換えれば、学問のための準備が勉強であるとも言える。

そのような学問は、今の社会では大学や大学院で追求するものとなっている。

2高校までは言わばその準備で、将来の専門の学問を開花させるために、幅広く教養を身につけるとい位置づけだ。

ところが、学問の府とも呼ばれた大学が、高校の延長のようになっている。**3**自ら何かを追求するのではなく、与えられたものを吸収するだけの場になっているのである。

では、学問を取り戻すために何をすればよいのだろうか。一つは発表である。自分の学問の主人公となることだ。

4もう一つは実践であろう。つまり学問の結果を社会への貢献に結びつけることである。

大人の扱いをされることによって、人間は大人になる。大学を学問の場にするのは、高校、中学校、小学校を、学問のための勉強の場にするのだ。**5**それは、勉強のための勉強とはおのずから異なるものになるだろう。

勉強のための勉強におけるテストは、次のように作られることが多い。第一に、問題の出所となるテキストが決まっていることである。

つまり、余計なことは考えずに、与えられたテキストを素直に時間をかけて学ぶことが合格する道になる。

6第二は、そのテキストの習得の度合いに応じて点数がきれいに比例する問題がよしとされることである。だから、合格点を取るためには、難しい問題は後回しにして、易しい問題から確実に解くようになる。

7こういうテストで高得点を取るための勉強に適應することによって、人間は批判精神を失い、無駄な回り道を避け、難しい問題は先送りし、前例に基づいた発想をするようになる。それは、困難な問題に挑戦し、解決を創造的に考える学問の姿勢とは正反対のものだ。

8中国の官吏登用試験であう科挙は、まさしくこういう試験であった。だから、科挙を合格した最も優秀な人材によって支えられていたはずの清朝政府は、近代化に対応することができなかつたのである。

9しかし、この構図は、あまりにも現代の日本の社会と似ていないだろうか。

勉強という人工的に作られた優秀さではなく、学問という真の優秀さを目指すことが求められている。

0

(言葉の森長文作成委員会 M)

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

1 自由とは、人間の本質の一つである。本来できるはずのことを制約されるというのは、人間には耐えがたい。例えば、家の中でくつろぐときも学校の制服を着ていなければならないとなったら、誰でも反発するだろう。2 同様に、自由な情報、自由な研究、自由な商売などを奪われれば、多くの人はその自由を取り戻すために立ち上がろうとする。たとえそれが生命の危険と引き換えになったとしても、人間の自由を求める思いは消すことができない。これが、人類の自由の歴史を進歩させてきた。

3 一方、平等も人間の本質の一つである。例えば、兄弟の中で理由もなく一人の子だけがおやつを食べることができ、ほかの一人の子は我慢していなければならないとなれば、その不平等を甘んじて受け入れる子はいない。

4 日本が日露戦争でロシアに勝つまでの世界では、白人と有色人種の関係が同じようなものだった。日本とアメリカとの間で行われた太平洋戦争にはいろいろな見方があるが、この戦争が世界の国々の間に残っていた根本的な不平等である植民地支配を終わらせたという点で、日本は本当は勝ったのだという人もいる。5 平等を求める思いもまた、多くの犠牲を伴いながら、人類の歴史を進歩させてきた。

しかし、この自由と平等が対立する概念であるかのように思われている。自由は不平等を生み、平等は不自由を生むというのである。6 確かに、欧米流の弱肉強食の自由は、人間社会に不平等を生み出してきた。逆に、社会主義国における平等の建前は、国民の自由を奪うための大義名分となっている。自由と平等は、両立し得ないのだろうか。7 そうではない。自由か平等かという設定の仕方に大きな誤解があるのである。自由を求める気持ちも、平等を求める気持ちも、これまでに、その根底にあるものの多くはエゴイズムだった。8 つまり、自分の利益のための自由、自分の利益のための平等であるからこそ、自由の追求も、平等の追求も、他人の自由や平等としばしば対立する形で実現されてきたのである。

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

原点は、相手のためを思う気持ちだ。もちろん、人間は肉体を持つが故にエゴイズムをなくすることはできない。9 だが、そのエゴイズムと同じくらい大きな愛を持つことができれば、自由とは人間のための自由であり、平等もまた人間のための平等となる。問われているのは、人間の外側にある理念ではなく、人間の生き方そのものである。0

(言葉の森長文作成委員会 M)

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34